人間味あふれる学園長先生

――三十年代の生徒募集から――

小田正彦

私学は現在でも殿様稼業では生き残ることはできない。説明会を開いたり、学校訪問をしたり、新聞広告に出したりして生徒を集めるのに努力している。如何に生徒を集めるかが学校の評価にも繋がっている。

私も学園に勤めはじめて一年目から中学校訪問をしたものである。最初は、町内のA中学校へ、学園長から「教

育方針、授業内容」を事前にしっかり聞き「これだけは話して先生方にも良くお願いしなさい」まるで学校の売込み、当時学校があれば生徒は集まるものと思っていたものである。世間の風評も香しくなく「学力が無くても入れる学校」「花嫁ドカチン学校」と言われていた。

募集期には時間割を操作したり、自習にして担当地域に出たものである。私は一度学園長に「豊田郡の中学校に一緒に行こう」と言われた事がある。多分、私がいい加減な生徒募集をしているくらいに思われたのかも知れない。出張が決まると『朝、何時に出発するか』「七時頃迎えにいきましょう」『それは遅い』『六時に迎えにきなさい。ちゃんと準備をしとるけぇ』こんな遣り取りであった。

私は自動車の運転、地理には自信があった。朝迎えに行くと、学園長は和服を整え、弁当、お茶、お菓子を準備して待っておられた。

『中学校は何校行くんか』「大崎上島四校、大崎下島二校予定しています」「先生、寝られたらよいですよ」『あんたが運転しているのに寝るわけにはいかんよ』『菓子を食べんさい』『お茶もあるよ』など学園長の心遣いが大変嬉しかった。竹原からフェリーで島に渡り、中学校を訪問したものである。

中学校では、開口一番相手が校長先生であろうと、先生であろうと、まず「教育方針から教育内容（当時家庭科中心であったため）和裁・洋裁が出来、礼儀作法を身につけ、婦道の完成を目指している学校である」ことをとうとうと話されたものである。

食事時分になると、『食堂はどこかにないんか』「弁当があるんでしょう」『あんたは食堂で暖かいもんでも食べんさい』等々私への心遣いがいつも感じられる感激一入のものがあった。これは私一人ではなくどんな場であろう

と全員が思っていたことである。個人的な付き合いから、組織の上の付き合い、全体や相手の気持を考え、思い遣るお気持がいつも働いていたように思う。この事が、己れを生かし、人を動かし育てる、今日の学園発展に結び付いたものと思う。

学園長は、記憶力抜群だった。当時、校内の教具・教材などの数、場所は学園長に聞けば一発で返事がかえってきた。どの部屋に何個、どこに行けば幕が何枚、白幕であろうと黒幕であろうと直ぐ応えられた。そのあと『このくらいの事覚えときんさい』『私は全部知っとるよ』『しっかりしんさいな』と言われたことは数えきれないほどある。

これらはほんの一端であるが、ここまで事業を興される中で学園長先生は常に『小さな力で大きな効果を産み出す』ことには真に天才的な力量を発揮されていたと思う。

私の人生の大半をこの大きな師の翼のもとで薫陶をうけたことは何よりの宝である。

武田ミキ学園長先生の常に言われた『為せば成る、為さねば成らぬ何事も、成らぬは人の為さぬなりけり』『無から有を生む』（少ない学資で、最大効果をあげる教育）などの言葉はもう聞く事はできないが、この精神主義をおもんじる気風は永遠に受け継がれていくものと思われる。長い間のご指導誠に有り難うございました。

合掌